

侍

風花が舞っている。風は冷たいが日差しは暖かい。

寒さに頬を赤くして、馬に乗った若者が丘に登っている。従者が馬の手綱を引いている。

「若様は筋がよろしゅうございます」

「この歳で初めて馬に乗るのだ。筋がよいも悪いもないだろう」

「そんなことはございません。ひと月もあればどんな馬も乗りこなせるようになるでしょう」

「そんな時間はない」

言いながら、若者は珍しそうにあたりを見回した。刈り取りが終わり、ひこばえが伸びた田んぼで女たちが集まって何かしている。

「あれは何をしているのだ」

「柄杓の柄に竹を接いでいるのです。長柄杓と申します。昔ならば、『』といつことになるといふじょう」

「あんな枯れた竹でよいのか」

「枯れた竹の方が軽くて振り回しやすいのです」

「さて、父上に挨拶してくるか」

「大丈夫ですか」

「なあと、正体が分かったからといって命を取られる訳ではない」

「ですが、若様の計画はどうなります」

「ここは通らねばならぬ。顔を見せてこよう」

丘の上に小さな陣が張ってあった。鎧を着た小太りの男が座って部下の報告を聞いていた。この国の城主川辺憲昭のりあきである。若者が近づくとふと顔を上げた。

若者が馬を下りると従者は手近の木に手綱を縛り、若者に続いた。

「父上、お久しゅうございます」

男はこの若者は誰だったかと思い出そうとした。見覚えのある顔だが名前を思い出せない。

「藤丸でございます。長らく臥せっておりますが、先月の高野聖の加持祈祷以来、驚く程気分がよくなりまして、このように馬にも乗れるようになつた次第です」

あれは死んだのではなかったか。男は一瞬そう思った。いや、不治の病と聞いただけだったか。藤丸の母は桔梗だ。確かにこの若者には桔梗の面影がある。いや桔梗にそっくりだ。男の子は母親に似るといふがここまで似ていることは少

ない。そうか、治ったのか。加持祈祷も効くことがあるのだな。だが、まだ弱々しいところがある。

「おおそうか、それはよかったな」

「父上、お願いがございます。私も戦に出たく存じます」

三年前ならば、なんと頼もしい子を持ったと誇れただろう。

「わかっていいのか。もう普通の戦ではないのだぞ」

「それでも戦って勝たなければならぬことに変わりはありません。私も戦いたく存じます」

「ならば加藤の下につけ。儂から加藤に言っておく」

「ありがとうございます、父上」

正隆は主に出会った日のことを思い出した。そこ頃、正隆は腑抜けになっていた。武士の子として生まれ、大きな手柄こそないものの既に三度の戦を経験し、これから手柄を立てて父の名に恥じない武士になろうと思っていたところに、あの出来事である。腹でも切るか、出家するか若武者たちはみんなそう考えたものだ。

年寄りたちはすぐに元に戻る、そのための計略を練っているところだという。それから何年か経ったが、計略はなんの成果も上げていない。侍の威厳は地に落ちたままだ。

主に会ってから正隆は変わった。

「頼みがある」

あの方はそう言った。ただ命じるだけで良かったのに。

「私の下に付いてくれ。私の家来になって欲しい」「今でも家来でございます。ご命令があればおっしゃってください」

「父上の家来だろう。私の家来になって欲しい」本来ならばそれは出来ないことだ。少なくとも正隆が決めることではない。だが、正隆は腑抜けになっていたし、投げやりにもなっていた。殿様の子の我がままだろうと高をくくっていた。

「よろしゅうございます。家来になりましょう」「よいのだな」

「武士に二言はありません」

「聞いたところによると、この世は天の理、地の理、人の理の三つの理で動いているそうだな。天の理は朝に日が昇り、夕べに日が沈むように働くものだ。地の理は冬に雪が降るよつに梅

雨に雨が降るように働くものだ」と

「そのように聞いております」

「では人の理はどうだ。武士が百姓の上に立つことか。男が戦をし、女が飯を炊くことか」

「もう武士は百姓の上に立つておりません」

「そうだな。私は思うのだ。人の理は人によつて変えられるのではないかと。百姓たちはそれを教えてくれた」

「ですが、今度のことも長くは続かないでしょう」

「私もそう思う。だが、人の命は短いものだ。あれ以来病死も含めれば結構な人数が死んだのではないか。死んだ人にとっては人の理は変わったままだ。私だつていつ死ぬかもしれないのだぞ」

難しいことを言うお方だと正隆は思った。

「自分の運命をただ手をこまねいて見ているのは嫌なのだ。私も人の理に挑んでみよつと思つ。手伝つてもうらぞ」

籤引き

それより更に前、稲刈りを終えた日に、村の男たちは集まって酒を飲んだ。村祭りにはまだ早い。それは今田圃で竹竿に掛けて干してある稲を取り込んで脱穀が終わってからである。そ

れでも大きな仕事はもう終わり、心配事はなくなつた。

薄暗い小屋の中で、百姓たちは車座になって、相談をする。

「いやあ、今年の稲の出来は良かったべ。去年の当たり籤が効いただな」

「まったく、この野郎は二年も続けて、当たりを引きやがって。今年はくじ引きを遠慮したがええだ」

「んだな。今年もおめらの集落が当たりを引くようなことあつたら、火い付けた上、叩き殺すつちゆうてるもんがあるからのつ」

「そつただこと言つても、当たり外れはお天道様の決めることだべ。それに逆らつちやならねえべ」

「んだども、おめえらが遠慮すりやあ、お天道様も文句はいうめえ。なんちゆうても、命は大切にするもんだべ」

言葉はともあれ脅迫である。百姓の村では一部の人だけが良い目を見ることを嫌う。

「わかつただよ。今年の籤は遠慮させてもらつてべ」
残りの男たちが藁で籤を作り、一人ずつそれを引いた。

「当たり前引いたんなあ誰だべ。なんじゃ山根の集落かいや。こりゃあ、困っただな。あそこは一番山奥の田圃でねえべか。あんなところでどうやって戦するだべ」

「まあそりゃあ、侍の考えることだべ」

「んなことより、山根の田圃で戦するとなると、相手は山脇の殿様ちゆうことになるべ」

「んだな。あそこからどう山を越えても山脇領だかな。山脇飛び越して谷本と戦するわけにはいかねえべ」

「んだども、山脇の爺さんは若い妾をもらったばかりで、毎日やりまくっていて戦なんぞする気はねえっちゆう話だべ」

「んだな。七人目の妾で十六の娘だな」

「爺さん、若い娘が好きだかな」

「なんでも、その妾に早乙女衣装着せて、座敷で田植えの真似事させんだと。それで、腰曲げたところを後ろから抱き抱えて乳もんで、あれえお殿様お止めくだせえ……」

「おめえ、なにひとりで悶えてんだ。ほれ、若い娘ならおれらの殿様んところにもいるでねえか。あの娘が、山脇の殿様に惚れただども、父殿が許さねえっちゆう筋書きはどうだべ」

「んだども、山脇の爺さん面食いだで。うちの
お姫さんが別嬪ちゅう噂は聞いたことがねえだ」
「んだ、別嬪も何も顔も見たことねえだ」
「なに構うことねえべや。噂はこれから流せば
いいべ。絵にも描けねえ別嬪だべ」
「そりゃあ、見たことねえ顔は絵に描けねえべ」
「爺さん、食いつくべか」
「すぐえ名器の未通女つて付け加えりゃあいいべ」
「未通女で名器はねえべ」
「名器の家系だべ」
「ああいうもんは家系で決まるもんだべか」
「んだ。今からそう決まっただ」

学者

藤丸と正隆が丘を下って行くと、道の脇から変わった風体の男が寄って来た。寝癖なのかボサボサの髪で、目には目脂がこびりつき、鼻からは鼻毛が盛大に伸びている。着ている服も変わっている。晒し綿の細筒袖。男の白無垢は死に装束だが、無垢というには何やら正体不明の汚れがあちこちに付着していて、これから死のうという覚悟は見えない。何がおかしいのか、終止にやにやと笑っている。あのことがあって以来

こういう輩が多い。正隆は、叔父が以前にこんな様子だったことを思い出した。

「あんた、少しは偉そうじゃな。どうだ、わしの策を聞かんか」

口を開くと口臭が凄まじく、齒はいくつも抜け落ちていいる。それなのに男は自信たっぷり、口では偉そうだと言いなながら少しもへりくだったところがない。まったく、人はこうなってしまうと終わりだな、正隆は男を追い払おうとした。それを制して藤丸が声を掛けた。

「お前は何者か」

「おお、これは失礼した。わしは農地の土の研究をしているもんじゃ。いや正直に言つとじゃな、肥やしの研究をしているんじゃよ。肥え学者とか、糞学者と呼ぶものもあるが、わしは泥学者と自称してゐる。泥学者の中山吉右衛門じゃ」

学者か。正隆は思い違いをしていたことに気づいた。だが、正気の間人には別の危険がある。農地の研究をしているということとは敵か。

「百姓の一味か」

正隆の聲が険しくなる。

「いやいや、あいつらは学がなさを過ぎる。わしの話の少しも理解出来んのじゃ」

吉右衛門はさびしそうにつぶやいた。

「策があると言ったな」

「上策じゃよ、上策」

吉右衛門は聞き手があると見ると急に機嫌が良くなった。気分の変わり方はまるで子供のようだ。

「話してみよ」

「若様」

正隆は止めようとしたが、藤丸の真剣な眼差しにたじろいだ。

泥学者を自称する中山吉右衛門は奇妙な策を語った。

「ふむ、それは面白い。私の目の前でやってみせてくれぬか」

中山吉右衛門は突然きひひひと笑い出した。「いや、失礼した。あんた侍にしておくのは惜しい。やってみせてくれとはな。嘘だろうとも、本当かとも言わずにやってみせてくれと来た。ひひひ、見せてやるとも。付いて来るがいい」

百姓

三年前、百姓たちの革命が起こった。事の発端はさらに遡る。

二つの国はともに小国であった。山地から流れ出る一本の川の上流と下流に位置する二つの国の間には争いが絶えなかった。上の国は土地が狭く地味もやせていて米の出来が悪かった。下の国は土地が広く地味も肥えていたが、しばしば水不足に悩まされた。日照りになると、上の国で川の水を使いきってしまうからである。一方、大雨が降ると川の上流が氾濫して、土地を削り、少ない土を下流に流してしまう。流されてきた土で下流の土地はますます豊かになっていく。

百姓たちが争っていた時代はまだよかったが、侍の世になってからは毎年のように二国の間で戦が行われるようになった。兵の主力は米の収穫を終えた農閑期の百姓たちであった。

ある年、下の国はよその国から早稲米の種籾を仕入れて上の国で稲刈りが済まないうちに、天日干しから脱穀まで済ませてしまった。そして、農作業の終わった百姓たちを招集して、上の国に攻め入った。兵はあと一日か二日で稲刈りが出来るところまで稲の稔った田圃を踏み荒らし、戦いを繰り広げた。

翌年は上の国も早稲米を撒いたが、地味もやせている上に、山の陰になって日も当たらないの

で、下流の国より先に収穫するのは無理であった。国主の殿様は、悔しがったが、ついに命令を下した。

「侍はどんなことをしても戦に勝たなければならぬ。刈り取りは止めだ。百姓を集めて、戦の準備をさせる。稲刈りは戦いの後でも出来る」

稲刈りを前に集められた百姓たちは、馬が稲を踏みつぶして進むのを気にしながら、下の国に攻め込んだ。突然攻め込まれた下の国で侍たちは戦の準備ができていなかったが、田圃に踏み込まれた百姓たちは、稲刈りのために研いでおいた鎌を手に必死の防戦をした。稲の間に身を潜めて、走り込んできた馬の足首を鎌で切り落とした。百姓たちはこれまでの戦より必死で戦った。刈り入れ前の稲を守るために、そうしなければならなかったのだ。

やがて下の国は、上の国の兵を押し返して、上の国に攻め入った。ようやく下の国の侍たちも体勢を整えて、百姓たちとともに上の国に入った。そして上の国の田圃は踏み荒らされ、上の国は戦に敗れた。

それだけでは終わらなかった。上の国の百姓たちは怒っていた。怒り狂っていた。一年がかりで

育て上げた稲がみんなダメになってしまった。それは全部侍のせいだ。来年どうやって食って行ったらいいかわからないのに、侍は年貢を上げた。百姓たちははらわたが煮えくり返るほどの怒りを覚えた。そして侍に反旗をひるがえした。

「おれたちやあ、農閑期だから戦につきあつてやつてたんだ。百姓つてのはな、どんなことをしてでも作物を育て守るもんだ。おまえら侍が田圃を荒らすなら、おまえらは百姓の敵だ」

上の国の侍は弱っていた。負け戦で主力となる武将が倒されていた。城主は二年連続の負け戦ですっかり氣力を削がれていた。百姓たちは侍に戦いを仕掛けた日、何食わぬ顔をして、肥桶をかついで城に入り、井戸に中身をぶちまけた。米蔵に入り込んで、米俵の山にたつぷりと肥をかけた。酒樽をあけて小便をするやつもいた。あらゆる食料が糞尿にまみれた。それから百姓たちは侍や城の女子供に肥桶の中身をかけていった。何人も百姓が斬り殺された。そんなことはどうでもよかった。煮えくり返ったはらわたは斬り殺されたくらいでは収まらない。

侍たちはどう戦ってよいかわからなかった。柄杓で糞便をかけてくる相手とどう戦えばよいの

か。名乗りも上げないで斬りつけるのか。それでも城の中に入り込んだ百姓を皆殺しにし、体を洗おうと川に入ると、そこで百姓に待ち伏せされて、またも糞尿をかけられることになった。百姓たちは野山に隠れ、執拗に糞尿をまき散らし、侍たちに水と食料を与えなかった。

侍たちはくそまみれの飯を食い、腹を壊して戦う氣力を失った。多くの侍は汚れた食料を食った時に、既に戦意をなくしていた。多くの百姓が死に、侍は一人も死ななかつたが、百姓が戦いに勝った。

下の国の百姓たちもこの戦いの噂を聞いた。

「今しかねえだ。おらたちも侍に戦をしかけるだ」
下の国の百姓たちは城に乗り込まなかつた。城に届ける野菜にこっそり糞便を混ぜて行った。少しずつ入れ、どくだみなどの匂いのきつい草を野菜のかごに付けて、匂いをごまかした。どうしてもごまかせない時は、「さつき、肥溜めに片足つつこんじまってな。そんなに臭えけえ」などとぼけた。

そして侍たちが腹を壊した隙に城に乗り込んで、乗っ取ってしまった。

こうして下の国でも百姓が侍を支配するよう

になった。

日本中で百姓が侍に反旗を翻し、勝利した。しかし、百姓たちは侍に取って代わったわけではない。作物を作ることをやめたら、百姓とは言えない。百姓が要求したのは、戦の仕方を変えることであつた。

「忍が関わっていたらしいな」

「そんな噂もありました」

不寝番

百姓の決めた戦の前日であつた。薄寒い日だったが、日が暮れると急に寒さが増した。

「これは雪になるかもしれない」

「なんじゃと、それは大変じゃ」

いつもにやにやと笑って正体の知れない吉右衛門が本当に慌てているように見えた。

「炭はないか。なんとか炭を集めてくれ」

「どうしたというんだ」

「寒いと屁炉へろがうまく働かんのじゃ。今晚は火を焚いて寝ずの番をせねばなるまい。炭がなければ、薪でもいい」

「正隆、炭か薪の手配は出来るか」

「はっ、薪ならばなんとか」

「酒も頼むぞ」

「用意してやるう。その代わり私たちも付き合
わせてもらう」

「好きにするがいい。だが、臭いぞ。小作、小作」
吉右衛門が呼ぶと、どこからともなく子供が現
れた。歳は十くらいだろうか、小柄だが顔は大
人びている。

「お師匠さま、ご用は？」

「この人についていって薪をもらって来るんじゃ。
酒もな」

小山の中腹に作られたそれは、七割ほどを地中
に埋め込まれた丸い饅頭のような形をしていた。
入り口は饅頭から少し離れて、便所のような小
屋あった。重ねられた筵を押しつけて中に入る
と、すぐに地中に梯子がかけてあり、うっかり
するとそのまま落ちそうになる。梯子を下りて
水たまりのできた横道を手探りで進むと、よう
やくろうそくの明かりの点いた少し広い部屋に
出る。

そこには地表に出ている饅頭のちょうど裏側に

当たる部分で、巨大な竈のように丸く土を固めてあった。そこに動物の臓物から作られた袋がいくつか取り付けられていて、袋からは竹の棒が突き出していた。竹の棒はさらにいくつかの絡繰りを経て踏み板に繋がっている。

部屋の中にいるはずの吉右衛門の姿が見えないと思つたら、部屋からさらに饅頭を取り囲むように伸びている細い穴から、後ずさりしながら出てきた。狸が通りそうな穴で、そこから吉右衛門が出てきたところを見ていなければ、人間が入れるとは思えない。

「炭が少しでもあつて助かつたわい。火は付けたぞ。あとは酒を飲みながら、火を絶やさないようにすればいい。おっと、煙突はちゃんと働いているだろうな」

吉右衛門が出てきた穴と、もうひとつ入り口に近い方にも同じような穴があいていたが、そこから煙の筋が出てきて、部屋の上に開いた同じように細い穴から地上に抜けて行った。

吉右衛門が動作を確かめるように、踏み板を軽く二三度踏むと、絡繰りを経て革の袋に繋がった竹の棒が前後に動き、袋は縮んだり膨らんだりした。そして竹の棒を結んである接合部から

は、糞便の匂いが漏れてきた。

「若様、本当にここで寝ずの番をするつもりですか」

「ああ、そのつもりだ」

「しかし、お休みならなくては、明日の戦いに障ります」

「おまえは、初陣の前の晩に眠れたか」

「私は兄上たちに酒を飲まされて、寝てしまいました。初陣は二日酔いでしたよ」

「そうか、では私も少し飲もう」

「若様」

「はっはっは、構うもんじゃあるまい。こんな世の中じゃからな、大勢で飲んだ方が気持ちがいいわい」

吉右衛門は正隆の気持ちなど構わないように、どんぶりに酒を注いで差し出した。そのどんぶりもどうも怪しい。堆肥や糞便を入れるのに使ったことがあるに違いないと正隆は思う。藤丸は、すらりとしたきれいな手を伸ばしてそのどんぶりを受け取った。ためらいもせずにくいと飲む。すごい人だ。器が違う。正隆はすぐに感心する。「おまえも飲め」

藤丸が渡したどんぶりを正隆は少しためらって

くるりと半分まわして口をつけた。

「何をやっている。お茶のつもりか」

藤丸は正隆をからかった。

「あの小作という少年はどこに行きました？」

「小作がどうかしたか」

「体に似合わず力があるので驚きました」

「もとは忍じゃからな」

「もとはというは今？」

「今は見ての通りわしの弟子じゃよ」

「忍を抜けたのか、そんなことが出来るのか」

「坊主と学者はな、なるべきものがなるもんじゃ。」

忍を抜けようが抜けまいが、あれがこの世の理

を知りたいと思つた時から、あれには学者にな

るしか道はないのじゃよ」

「この世の理は乱れております」

「そんなことはないわい。お天道様は毎朝顔を

だすじゃないか」

「もちろん、正隆は百姓の戦のことを言ってい

る。これはどうか」

「昔は貴族の世じゃったよ。それが侍の世にな

り、また百姓の世になる。別に不思議でもない

が、不思議と見れば不思議かもしれんのお。わ

しには残念ながら不思議とみることは出来んの

「じゃが」

「やはり、変わることがあるというのだな。私は、この世の理には決して変わらぬ天の理と、土地によって変わる地の理と、時によって変わる人の理があると思う」

「そうかも知れん。また、どう変わるかという変わり方に理があるのかもしれない」

「変わり方の理とは一体どういうことが、教えてくれぬか」

「いや、単に言ってみただけじゃよ。お主に考えがあるなら、先に言ってみたらどうじゃ」

吉右衛門は意地悪く言う。正隆には意地が悪く失礼なやつだとしか思えないのだが、主は気にしていないようだ。

「侍は槍や刀という武器を持っている。これは人の生死を自在にするものだ。従って、侍が人を支配するのは当然のことである。これが侍の理屈であった。一方、百姓は米や野菜を作る。食べ物がないければ人は生きていけないから、これも人の命を自在にする物である。それならば百姓が人を支配してもよいはずだ」

「藤丸様、百姓の作る物以外にも食べ物があります」

主に反論するなど、正隆は心苦しいが、藤丸はしばしばそれを求める。そして、反論されると喜んでるように見える。結局は正隆が論破されてしまうのであるが。

「そうだな。それを言うなら、武器で殺される以外にも病気で死ぬではないか。いや、人は歳を取れば必ず死ぬ。侍のすることは必ず死ぬ者を少し早く殺すだけだ。どれだけの価値があるのか」

「侍は人の命を守るために戦うのです」

「味方の命を守るために、敵を殺すのだな。侍などいなければ、守る必要もあるまい」

「蝦夷や獣が襲います」

「坂上田村麻呂公の時代ならともかく、源頼朝公が鎌倉に幕府を開いてから後は、蝦夷との戦闘など年に一度もないのではないか。あっても、小競り合いであろう。大きな戦ならもっと話が伝わってくるはずではないか」

「元寇がございました」

「うむ、確かにそうだな」

「いや、なかなか面白いもんじゃ。いいつまみになるわい」

吉右衛門はそう言ってまた飲む。つまみらしい

ものは味噌が一山お椀に盛ってあるだけだ。正隆にはその味噌が違つものに見えて仕方がない。

「元の兵士とて侍の一種であろう。それもまてめていなければ何も問題はあるまい」

「そんなことあり得ません。外とつ国のことはどうにもならないではありませんか」

「飯にということだ。いなくてもよいと思うことは出来るだろう。いなくするというわけではない」

「それは屁……」

いや、「これは言うてはいけないと正隆は思いとどまった。主の癖が移つたか、ついしゃべり過ぎた。

「屁のことならわしに任せておけ」

正隆の飲み込んだ言葉を吉右衛門が再び口にす。人の心情というものをまったく気にかけない。

「屁理屈については、わしの親父の言葉がなんといつても名言じゃぞ。子供の頃よく屁理屈をこねるなど言われたものじゃ。ある日何が理屈で何が屁理屈かわからないと、屁理屈をこねるのを止められないと言つとじゃな、親父はこつ言つたのじゃ。』おれの言つことが理屈で、お前

の言うことが屁理屈だ』と。なかなか素晴らしい言葉じゃろう。それ以来、わしは親父に屁理屈を言うのは止めたのじゃ」

「それからお師匠様の理屈が深まったのですね」「いや、親父と話をしなくなったのじゃよ。はっはっは」

吉右衛門はそこで酒をぐいと飲み、話を続けた。「しかしよく考えてみるとこれはなかなか面白いことだと気づいた。もちろん、その言葉自体が屁理屈だから矛盾していると考えられる。一方、その言葉が主張している内容を信じれば、その言葉は正しい理屈である。内容が間違っているとすれば、その言葉は正しくない。これは矛盾というより、当たり前のことである。矛盾と当たり前前は同時には成り立たないはずじゃろう」「お師匠様、屁理屈と理屈の違いを教えてください」

「そこじゃよ。親父の言葉はそれに対する回答だったのじゃから、それこそが屁理屈と理屈の違いを示していることになる。親父の名前は忘れてしまったので親右衛門とするとじゃな。『親右衛門の言うことが理屈で、吉右衛門の言うことが屁理屈だ』という意味に取れるが、別の考

えが方をする、誰にとっても『その人の言うことが理屈で、相手の言うことが屁理屈だ』という意味にも取れるじやろう。おれというのはわしにとつてはわしのことじゃからな」

「どうもあなたの言うことは分かりません。結局、理屈と屁理屈の違いは何なのですか」

「うむ。では問うが、この世には善人と悪人がおるじやろう。たいていは中間だとしてもじや。さて、善人と悪人の違いはなんじや」

「悪いことをするのが悪人ですよ」

「それではきき直そう。善人と悪人の見分け方はあるかな」

「簡単には見分けられません。善人ぶつた悪人というのがありますから。隠れて悪事を働いているなら、その現場を押さえないとわかりません」

「そうじやな。理屈と屁理屈の違いもそんなもんじゃない。屁理屈は理屈になっていないのだから、どこか間違いがあるはずじや。その間違いを見つけないければ、確かに屁理屈だとは言えないんじゃない」

「しかし、百姓の理屈は明らかに屁理屈でしょう」

「うむ、なんでじや」

「常識に反しています」

「うむ、それは正しいな。常識に反する結論はまず疑ってかからねばならん。その通りじゃ。問題はどこが間違っているかじゃよ」「よ」

「百姓が侍の上に立つという点が間違っています」「それは結論が常識に反しているというだけじゃよ。結論には正しいも間違いもない。前提が間違っているか、理屈の展開が間違っているかのどちらかしかないんじゃない」

「百姓が侍の上に立つなんて間違ってますよ。屁理屈ですよ」

正隆は酔いがまわったのか同じことを繰り返した。

「結局、おぬしはわしの親父と一緒じゃよ」

「吉右衛門殿。しかし、前提と理屈だけで正しさが決まるなら、正しいことがたくさんあるということになるではありませんか」

藤丸が正隆の代わりに聞いた。

「そのとおりじゃよ。別に何でもいいじゃろつ。侍が人の上に立とうと、百姓が人の上に立とうと、商人が人の上に立とうと、忍じゃろつと、学者じゃろつと」

「しかし、実際にはどれかひとつしか成り立ちませんが」

「うむ、まさにそのとおりじゃ。それゆえ、世の中は揺れ動くのじゃないかな」

「それでは、また侍の世の中になったり、貴族の世の中になったりするのですか」

「なるかもしれんのも。それとも女が男の上立つ世の中になるか」

「それは信じられませんね」

「それでは、生まれで身分が決まるのではなく、自分のなりたい身分になれる世はどうじゃ」

「みなが楽な身分になりたがるでしょう」

「楽な身分などない。身分に伴う責任を逃れて楽をしようとする奴がいるだけじゃ」

「しかし百姓ももつと別の戦を考えられなかったのでしょうか」

「別というと、どんな戦じゃ」

「田植えの速さを競い合つとか。それならば、侍ももつと納得したはずですよ。これではいずれ侍の不満が爆発するでしょう」

「確かにな。じゃがな、戦とは憎しみと憎しみのぶつかり合いなのじゃよ。こうなる前の戦で身内を殺された者がいるじゃろう。そういう者は次からは田植えの競争じゃと言われても納得せんじゃろう。それでは身内の敵が討てないか

らのう。今の戦い方ならばなんとか納得出来ないこともないというところじゃろうがな。大きな戦を起こしたいものはまず、人の憎しみを煽ることから始めるものじゃ。他所の国を罵る者が急に増える時は、誰かが戦の準備を始めたということじゃよ」

「それでは戦がなくなることはないということになりますか」

「百姓が侍に取って代わるという変わり方ではなく、人の在り方が変わらねばならんじゃろうな」

「人の在り方とは」

「人の心の在り方じゃな。わしにはようわからんよ。坊主の方が詳しくそうじゃがのう」

「寺方はこの世の有り様には関心がないように思えます」

「ならば、おぬしが考えてみたらどうじゃ。戦のない世をつくる人の心の在り方を」

戦

朝までに雪は止んだ。一面に薄く積もった雪に、朝日が当たってきらきらと輝いていた。空気はきんと冷えている。

ぼおぼおと法螺貝が鳴って、戦の始まりを告

げた。

「正隆、出るぞ」

藤丸はそつ言つと、馬を駆つて白く染まった田圃の中に走り出た。中央で馬を止める。追いついた正隆が、藤丸の馬に付けた肥桶から、長柄杓で肥を掬い取り、敵陣めがけて柄杓を振り回した。真つ白な田圃に一条の肥跡こえあとがつく。二人はそれを確認すると悠々と引き上げた。

挑発役である。

難しい役ではないが、度胸がいる。藤丸にはふさわしいと言えよう。

実を言えば、藤丸の腕では乱戦で馬を御せない。これくらいしか役に立てるところがないとも言える。多分に形式的な役割であるが、戦場の中央に立つのであるから、集中攻撃を受けることもあり得る。やはり度胸は必要なのである。

敵方からも挑発役が出て来て、同じように柄杓で肥を掛けてから、本格的な戦が始まった。糞よけの筵とともに長柄杓隊が進み出て、相手との距離を測つて柄杓を振り回す。

灰谷泥はいたにろすけ佑が肥俵を二俵、左の肩に担いでのっそり立ち上がった。禪一丁の巨体からは湯気が上がっている。内に満ちた闘気が溢れ出している

ようだ。

「灰泥さーん」

見物の百姓女から声援が跳ぶ。

泥佑はゆつゆつと歩きながらも、時折飛んでくる液肥みずこえをひよいとかわしていく。味方の前に出ると、肥俵の口を開けるのも面倒と、右の貫手を俵にさして中の堆肥を握り固める。そのまま敵に投げつければ、百発百中の命中力。当たるのを確かめもせずに、次から次へと肥俵に右手を差し込んで、中の堆肥を握っては投げ、握っては投げ……。獅子奮迅の活躍である。

泥佑が二俵目の肥俵を空にし、肥俵ごと手近な敵に投げつけた。この戦では肥料を使わない戦いは禁止されているから、次の肥俵を取りに戻らねばならない。そこにわずかな気のゆるみがあったのか、飛んで来た馬糞が泥佑の左顔面へぱり着いた。ひりたての温かく、湿った馬糞が耳から目にかかる。泥佑は馬糞を手でぬぐうと、飛んで来た方を睨んだ。

そこにいたのは縁部梅吉へりべうめきちとその愛馬天翔号てんしゅうごうであった。

縁部へりべうめは天翔号に後ろ向きに乗っていた。これこそ縁梅流乗馬術逆さ乗りである。縁部が天翔号

の尻を平手でポンとたたくと、天翔号はブリツと馬糞をひり落とす、その糞が地面に落ちるより前に、縁部がへらでホイと適切な空中に押しやる。そこを天翔号がバカーンと後足で蹴り飛ばす。見事な連携、人馬一体の乗馬術である。命中率にやや難があるが、射程の長さではこれに敵うものはない。

ブリツ、ホイツ、パカーン。ブリツ、ホイツ、パカーン。

誰も近づけない。飛んでくる馬糞を避けて逃げ惑うばかりである。

縁部と天翔号は糞が尽きるまで戦場で暴れまくり、それから悠々と引き上げた。

雑兵どもは、あるいは肥桶と柄杓を持ち、あるいは肥俵をかついで田圃を走り回った。糞尿がかかっても死ぬ訳ではないが、戦いは一層凄惨になる。田圃のあちこちで、敵味方の雑兵が組み合って、相手の目に糞便をすりこみ、糞尿の混ざり合ったどろりとした液体を耳に流し込むという戦いが行われた。

やがて真っ白だった田圃は糞尿と堆肥と融けた雪の混ざった臭い匂いを放つぬかるみに変わった。こうしてまき散らされた肥やし、翌年の

稲の生長と黄金色の豊かな稔りに結びつくのである。それが百姓の要求した戦の仕方であった。午後になつてわずかに風が出てくると、これを待つていた鶏糞隊が風上から、よく乾かした鶏糞を篩いに掛けてまき散らしたものだから、たまらない。

堆肥や肥桶などは平気で素手で扱つ百姓も、鶏糞をばらまく時だけは、口と鼻を手ぬぐいで覆つた上、風向きを考えて慎重に撒く位だ。細かな鶏糞が目から鼻から口からと、ところかまわず入つて来て、涙と咳とくしゃみが止まらず、戦うどころではない。両手で顔を覆つてうずくまれば、長柄杓の格好の標的となつて、糞尿を滝のように浴びせられる。涙でかすんだ目でうるうる歩き回れば、畦につまずいて、地面にたまった糞の山に顔を突つ込むことになる。

川辺方の陣形が鶏糞で乱れた。ここぞとばかりに山脇方が攻め込む。

「それ、小作。もうひと踏ん張りじゃ」

小作は汗を流しながら板を踏んだ。屁炉の中では攪拌板が回転し、糞尿をかき混ぜて発酵を促進する。生成された気体の圧力が高まり、屁炉の各所から漏れだして、匂いをまき散らす。吉

右衛門はふいごを動かして屁炉の中に空気を送り込む。

「よし、着火準備じゃ」

小作は燃え残っていた炭を火箸でつまんで先端に針を付け、屁炉から突き出している竹の筒に入れた。入れたところを晒して巻いてきりきりとねじり上げる。

吉右衛門が別の棒を動かすと、屁炉の中の糞尿の位置が変わり、土管のような筒がせり出した。「着火！」

小作が竹の筒を傾けると、中に入れた炭が筒の中を滑り降りる。途中にある紙のしきりを次々と針で破りながら、節を抜いた竹の筒を滑り降りた炭は、屁炉の中に滑り落ち、そこに溜まった高圧力の屁に着火する。

その瞬間、土管と屁炉のしきりが横に滑って燃え上がった屁と糞尿が一気に土管から発射された。

攻め込んで来た山脇方の軍勢はわけもわからないうちに大量の糞尿を浴びせられた。

「肥溜めに落ちたかと思っただ。いきなり周りが糞だらけになったもんで」

後に山脇方の足輕の一人はそう語った。

この時、実に肥桶七十三杯分の糞尿が一瞬にして山脇勢に浴びせられたのであった。勝敗は決まった。

逃亡

「ついて来いとは言わなかったぞ」
「主について行くのは臣下の務めですから」
「もう主ではない」
「私が主と決めたのですから」
「武士の真似はもうやめたんだ」
「それで逃げるのでございますか」
「ああ、山脇の爺さんは執念深いと評判だ。今回はなんとか勝てたが、いずれまた戦を仕掛けてくるだろう。常に勝てるとは限らん。私がない方がよい」
「お供いたします」
「ただ逃げるだけの卑怯者だぞ」
「お顔が……」
「顔がどうかしたか」
「卑怯者のお顔には見えません」
「そうか。人が死ななくても、戦とはくだらないものだと知ったからな。くだらない戦を避けるために逃げるなら、それもいいだろうと思っ

てな」

「やはり主と見込んだとおりでございませう」

「そうか、ならば付いて来てくれ。実は一人では心細かったのだ」